

平成 24・25 年度 熊本県教育委員会指定
環境教育研究推進校

研 究 紀 要

研究主題

自ら気づき、考え、行動する

球磨村っ子の育成

～球磨村からの情報発信～



平成 25 年 11 月 15 日 (金)
球磨村立一勝地小学校

は じ め に

現在、温暖化や自然破壊など地球環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっています。豊かな自然環境を守り、私たちの子孫に引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負荷が少なく持続可能な社会を構築することが大切だと言われています。

このような時代の要請のなかで、現行の小学校学習指導要領の総則には、「環境保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養う。」と謳われており、学校における環境教育においては、ただ単に子どもに環境に関する知識を習得させることだけではなく、環境に対する豊かな感受性や環境問題を自らの問題ととらえ、主体的に行動できる態度や実践力を身に付けた子どもを育成していくことが求められています。

そのためには、子どもたち一人一人が地球規模の視野で環境について考えるとともに、身近な地域の自然環境等に積極的に関わることで、子どもたちの環境を大切にしようする心を育てること、そして地域に根ざした環境の保全や実践的な態度を養うことのできるような環境教育を推進していくことが大切です。

このような中、本校は、平成 24・25 年度の 2 年間、熊本県教育委員会から「環境教育研究推進校」の指定を受け、研究主題に「自ら気づき、考え、行動する球磨村っ子の育成～球磨村からの情報発信～」を掲げ、研究推進に取り組んで参りました。

研究の推進に当たっては、本校教育目標にある「ふるさとを愛する子どもの育成」を視野に入れ、視点 1「環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫」、視点 2「各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫」、視点 3「地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実」の 3 つを研究の視点として教育実践に取り組んできたところです。

本日の研究発表会では、これまでの研究成果の発表と各教科等における環境学習の提案をさせていただきます。発表等には不十分な点多々あると思いますが、ご参会の皆様様の積極的なご意見やご感想をいただき、今後の研究の更なる充実・深化を図っていきたいと考えております。

最後になりましたが、本校の研究を進めるに当たり、ご指導・ご助言を賜りました熊本県教育委員会、球磨教育事務所、球磨村教育委員会及び関係諸機関の皆様様に心から感謝申し上げます、ご挨拶といたします。

平成 25 年 11 月 15 日

球磨村立一勝地小学校長
国武 靖士

目 次

研究主題 「自ら気づき、考え、行動する球磨村っ子の育成」 ～球磨村からの情報発信～

はじめに	
I 研究の概要	1
1 研究主題	
2 主題設定の理由	
(1) 環境教育の今日的課題から	
(2) 本校の教育目標から	
(3) 地域の実態から	
3 研究の方向性	2
(1) 本校の環境教育の方向性	
① 環境教育のねらい	
② 環境をとらえる視点	3
③ 環境教育で重視する能力と態度	4
(2) 研究の組織	
(3) 研究の仮説	5
(4) 研究の視点及び具体的な手立て	
① 視点1：環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫	
② 視点2：各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫	
③ 視点3：地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実	
(5) 研究の全体構想図	
II 研究の実際	6
1 教科等における取組の概要	
(1) 視点1：環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫について	
(2) 視点2：各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫について	
(3) 視点3：地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実について	
① 授業実践	
② 具体的な体験活動	
2 教科等における取組の実際	7
(1) 視点1：環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫について	
○ 第6学年 国語「海の命」(物語文)	8
(2) 視点2：各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫について	9
① 環境教育年間指導計画の見直し	
② 身近な環境と関連した学習展開	
③ 第2学年 生活「レッツゴー！ 村たんけん」	10
(3) 視点3：地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実について	
① 授業実践	
② 具体的な体験活動	
III 研究のまとめ	18
1 環境に関する意識調査(児童、保護者アンケート)から	
2 学校版環境ISO意識調査(平成25年9月集計分)から	
3 研究の成果(○)と課題(▲)	19
(1) 視点1「環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫」	
(2) 視点2「各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫」	
(3) 視点3「地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実」	
おわりに	

I 研究の概要

1 研究主題

「自ら気づき、考え、行動する球磨村っ子の育成」 ～球磨村からの情報発信～

2 主題設定の理由

(1) 環境教育の今日的課題から

豊かな現代社会における物資やエネルギーの大量消費に伴い、石油資源など天然資源の枯渇が危惧されて久しい。同時に、地球温暖化、オゾン層の破壊、熱帯林の減少など地球的規模の環境問題や、都市化、生活様式の変化に伴うゴミの増加、水質汚濁、大気汚染などの都市・生活型公害問題（水俣病問題を中心に）は、世界各国共通の課題となっている。このようなエネルギー・環境問題は、将来の人類存続と繁栄にとってはもちろんのこと、資源の乏しい我が国にとって重要な課題である。

それ故、環境教育は、国内的にも国際的にも大きな注目を集めており、新しい学習指導要領のもと、学校教育において環境教育の新たな展開が求められている。学校における環境教育は、環境教育の基礎となるものであることから、知識を習得させることだけに止まらず、環境に対する豊かな感受性と見識に基づいて、環境問題の解決に必要な判断力と主体的な行動ができる能力や態度の育成を図らなければならない。各教科等においては、これまでの環境教育の流れを把握し、また環境教育のねらいやそこで育成される能力・態度等を意識しつつ、持続可能な社会の構築をめざして環境教育の学習の充実を図っていくことが必要である。

(2) 本校の教育目標から

本校では、「ふるさとを愛し、心身ともにたくましく、自ら学ぶ子どもの育成」を教育目標に、その具現化に向かって全職員が心を一つにして日々の教育活動に取り組んでいる。本研究では、児童の環境に対する豊かな感受性を育みながら、環境問題の解決に必要な思考力・判断力・表現力を高めることに焦点を当て、「生きる力」の基礎となる「確かな学力」を身に付けさせたい。また、様々な取組を通して故郷や自分自身への自信を実感させながら、将来においてもよりよい環境を創造するために主体的に行動できる実践力を習得させたい。さらに、本校の環境保全活動等の取組や活動の様子や趣旨を発信する啓発活動の工夫にも努力していきたい。このような取組によって、「自ら気づき、考え、行動する児童の育成」が図られ、本校教育目標の具現化にもつながると考える。

(3) 地域の実態から

本校は、球磨村のほぼ中央に位置しており、広範囲に及ぶ校区の中央を日本三大急流の1つ球磨川が雄大に流れ、球泉洞（鍾乳洞）をはじめ日本棚田百選にも選ばれている松谷地区の棚田、たくさんのホタルが乱舞する川内川など豊かな自然環境に恵まれている。児童は、全体的に明るく素直であり、保護者の方々は学校教育への関心も高く協力的である。農業や林業に従事されている家庭も多い。校区のほとんどが森林地帯という恵まれた自然環境にある。しかしながら、児童が実際に身近な山や川で遊ぶ機会は少ない。また、消費社会に生まれ育った児童にとって、天然資源が有限であることや環境破壊の問題、そして地理的にも近い位置にある水俣病問題等は、認識はあるが重要な問題という意識は薄いのが現状である。

地域の豊かな自然の素晴らしさにある程度気づくことができているが、地球環境という視点に立って、環境保全に取り組んでいる児童は少ない。このことは、家庭や地域についても同様のことが言える。

以上のことから、学校総体として環境教育の充実を図りながら、児童一人一人に環境の保全に寄与する態度や能力を育成するために「自ら気づき、考え、行動する球磨村っ子の育成」を研究主題とし、以下のように研究を展開する。

3 研究の方向性

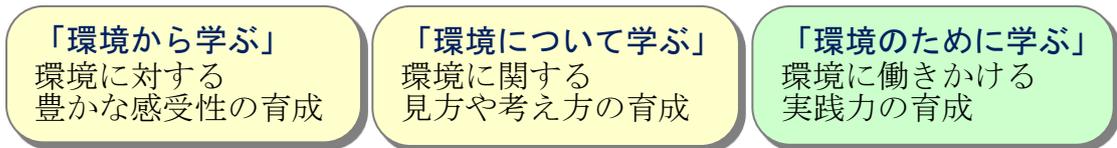
(1) 本校の環境教育の方向性

① 環境教育のねらい

国立教育政策研究所教育課程研究センター「環境教育指導資料」(小学校編)では、学校における環境教育のねらいが次のように記されている。

学校における環境教育の在り方については、平成8(1996)年の中央教育審議会第1次答申で示された「**環境から学ぶ**(豊かな自然や身近な地域社会の中での様々な体験活動を通して、自然に対する豊かな感受性や環境に対する関心等を培う。)', 「**環境について学ぶ**(環境や自然と人間とのかかわり、さらには、環境問題と社会経済システムの在り方や生活様式とのかかわりについて理解を深める。)', 「**環境のために学ぶ**(環境保全や環境の創造を具体的に実践する態度を身に付ける。)」という方針等に沿って取組がなされている。

ア 環境教育のねらいの具体的姿



(ア) 環境に対する豊かな感受性

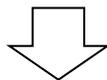
自分自身を取り巻くすべての環境に関する事物・現象に対して、興味・関心をもち、意欲的にかかわり、環境に対する豊かな感受性をもつことができるようにする。

(イ) 環境に関する見方や考え方

身近な環境や様々な自然、社会の事物・現象の中から自ら問題を見つけて解決していく問題解決の能力と、その過程を通して獲得できる知識や技能を身に付けることによって、環境に関して、持続可能な社会の構築につながる見方や考え方を育むようにする。

(ウ) 環境に働きかける実践力

環境保全のためにどのような生活様式をとり、どのような実践的な行動をとるべきかなどについて考えて行動することや、自ら責任ある行動をとり、協力して問題を解決していくことなどができるようにする。さらに、日々の生活における働きかけだけでなく、持続可能な社会の構築に向けて、将来においてもよりよい環境を創造するための働きかけをすることができる実践力も培うようにする。



つまり・・・

「環境から学ぶ」 環境に対する豊かな感受性
⇒児童が、環境に触れ合い、環境に対する**興味・関心**をもつ

「環境について学ぶ」 環境に関する見方や考え方
⇒児童が、環境について学習し、環境に関する**知識・技能**を身に付ける

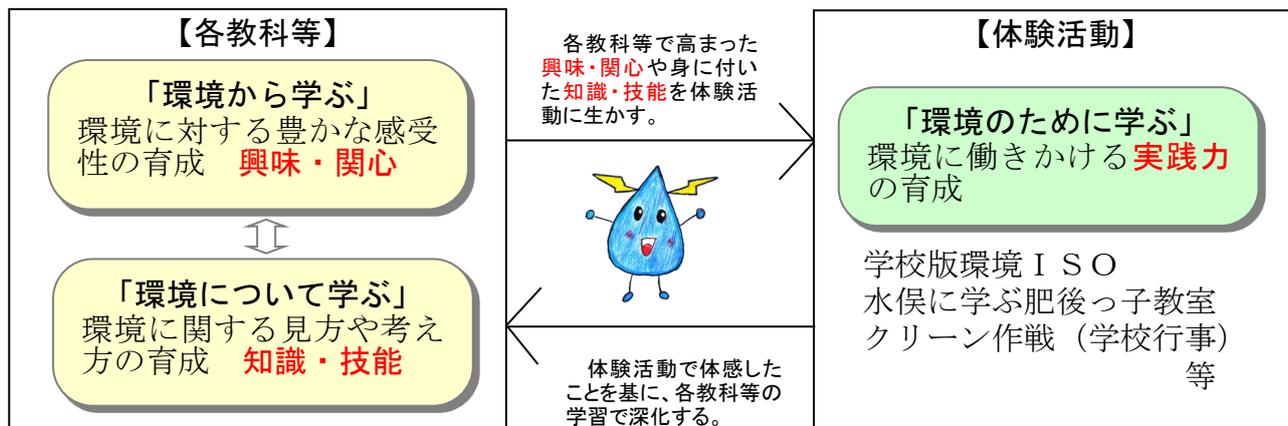
「環境のために学ぶ」 環境に働きかける実践力
⇒児童が、よりよい環境を創造する**実践力**を培う

各教科等で考えると

学校における環境教育のねらい	具体的な姿	ねらいを達成する場面	
「環境から学ぶ」 環境に対する豊かな感受性	環境に対する興味・関心をもつ。	各教科等	生活科 理科 社会科 道徳 総合的な学習の時間等
「環境について学ぶ」 環境に関する見方や考え方	環境に関する知識・技能を身に付ける。		
「環境のために学ぶ」 環境に働きかける実践力	よりよい環境を創造する実践力を培う。	体験活動	学校版環境 I S O 水俣に学ぶ肥後っ子教室 等

イ 学校における環境教育のねらいの関連

本校においては、環境教育のねらいが計画的・効果的に達成されるように環境教育と全ての教育活動との関連を次のように位置付けて、本研究を進めてきた。



各教科等の指導においては、身近な環境に触れ、関心や意欲を喚起したり、環境について学習し、知識・技能を身に付けたりしながら、環境に対する豊かな感受性及び環境に関する見方や考え方を育むようにする。また、「学校版環境 I S O」や「水俣に学ぶ肥後っ子教室」等の体験活動においては、環境に働きかける実践力の育成のために、地域や児童の実態に応じた体験活動を展開する。

これらの環境教育のねらいは、各教科等で高まった興味・関心や身に付いた知識・技能を体験活動に生かしたり、体験活動で体感したことを基に、各教科等の学習で深化したりして、互いに関連しながら高まっていくものとする。

② 環境をとらえる視点

環境教育を進めるに当たっては、能力や態度の育成だけでなく、自然や社会の事物・現象を多面的・総合的にとらえることができるようにすることが重要である。そのためには、次のような視点を児童が意識することが大切である。

環境をとらえる視点：国立教育政策研究所教育課程研究センター「環境教育指導資料」（小学校編）より

循環	多様性	生態系	共生	有限性	保全
----	-----	-----	----	-----	----

【**循環**】地球上では、様々な物質やエネルギーの循環がなされている。人間の活動によって循環が阻害されることがあるが、環境負荷を減らし、循環型社会の実現を目指すことが大切である。

【**多様性**】地球上の生物は、数十億年に及ぶ進化の過程を経て、様々な姿や生活様式を見せている。生物多様性は、生態系の多様性、種の多様性（種間多様性）、遺伝的多様性（種内多様性）という三つの階層でとらえることができる。それぞれの階層で、保全を考える必要がある。

【**生態系**】生物とそれを巻き巻く土壌、水、大気、太陽光などの非生物的環境との間の相互関係からなる自然のシステムのことを「生態系」という。生態系は、微妙なバランスの上に成り立っている。

【**共生**】異なる種類の生物が行動や生理活動において互いに緊密な関係を保ちながら生活している現象をいう。なお、「環境基本計画」では、人間の社会経済活動と自然環境の調和というような意味合いで定義されているように、本来の生物学的意味合いを離れて、より広い意味で使われることも多くなっている。

【**有限性**】再生産のできない燃料資源など、自然の資源は基本的に有限と考えられる。これらの資源を、次世代のために大切にしていける必要がある。

【**保全**】自然に手を加えずに保存するのではなく、自然の状態を調べ、適切に手を加えながら管理することによって積極的に自然を保護しようとする考え方が保全である。自然と人間が持続可能な関係を保ちつつ、生活していく必要がある。

↓ このようなことを踏まえて、本校の「環境をとらえる視点」を下記のように設定した。

国研	循環	多様性	生態系	共生	有限性	保全
一勝地小	節約・省資源		自然・人			保全

③ 環境教育で重視する能力と態度

環境教育においては、環境保全やよりよい環境の創造に主体的に関与できる能力を育成することや、生活環境や地球環境を構成する一員として、環境に対する人間の責任や役割を理解し、環境に積極的に働きかける態度を育成することも重要である。そのためには、次のような能力や態度の育成を図る必要がある。

環境教育で重視する能力と態度（熊本県教育委員会環境教育指導資料より）

【能力】

- 課題を発見する力
- 推論する力
- 計画を立てる力
- 情報を活用する力

【態度】

- 合意を形成しようとする態度
- 公正に判断しようとする態度
- 主体的に参加し、自ら実践しようとする態度



国立教育政策研究所教育課程研究センターと熊本県教育委員会の資料を参考にしながら、本校の「環境教育で重視する能力と態度」を次のように設定し、下記のようにまとめた。その際、能力を「気づく力」「考える力」「発信する力」、態度を「認めよう」「決めよう」「やってみよう」に変えて、児童にも能力や態度が理解しやすいものにした。

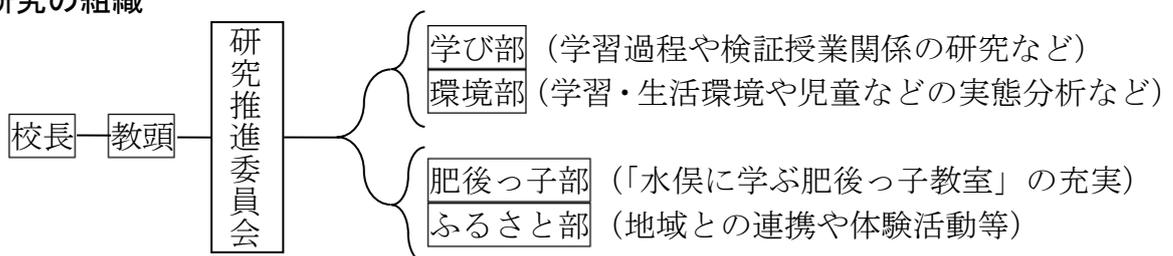
能力			態度			
環境に積極的に働きかけ、環境保全やよりよい環境の創造に主体的に関与できる能力			環境に対する人間の責任や役割を理解し、環境に積極的に働きかける態度			
気づく力	考える力	発信する力	認めよう	決めよう	やってみよう	
課題を発見する力	計画を立てる力	推論する力	情報を発信する力	合意を形成しようとする態度	公正に判断しようとする態度	自ら実践しようとする態度

一勝地小学校における「環境教育で重視する能力と態度」一覧 より↓

低学年：身の回り（学校や家庭） 中学年：地域（校区） 高学年：ふるさと（球磨村）

学年	環境教育で重視する能力				環境教育で重視する態度		
	環境に積極的に働きかけ、環境保全やよりよい環境の創造に主体的に関与できる能力				環境に対する人間の責任や役割を理解し、環境に積極的に働きかける態度		
	気づく力	考える力①	考える力②	発信する力	認めよう	決めよう	やってみよう
低学年 身の回り (家庭・学校)	身の回りの自然のおもしろさや不思議さに気づくことができる。	見通しをもって活動できるように、簡単な計画を立てることができる。	身の回りで体験・学習したことを基に、身近な環境について考えることができる。	身の回りで体験・学習したことを、色々な方法で伝えることができる。	身の回りの環境について、自分の考えや意見をもって表現することができる。相手の意見をしっかりと聞くことができる。	自分の生活を振り返り、自分で判断ができる。	自分たちの生活や地域の出来事について身近な人々と進んで交流をすることができる。
中学年 地域 (校区)	地域の環境や環境問題に対して、自ら、課題を発見することができる。	見通しをもって、観察・実験・調査等を行うことができるように、自分たちで計画を立てることができる。	地域の環境にかかわる事物・現象についての問題解決の過程で、実験・観察・調査から、その結果と地域の環境との関わりについて考えることができる。	地域の環境や環境問題に関して、視察・調査して情報を収集したり、効果的に活用したりして伝えることができる。	地域の環境や環境問題についての自分の考えと友だちの考えを比べながら聞いたり、考えを深めあったりすることができる。	地域の環境や環境問題の学習の成果と日常生活とを関連させることによって、くらしの中で正しい判断をすることができる。	地域の環境を見つめ、環境問題に関する情報収集に意欲的に取り組んだり、人との意見や情報の交換を行ったりすることができる。

(2) 研究の組織



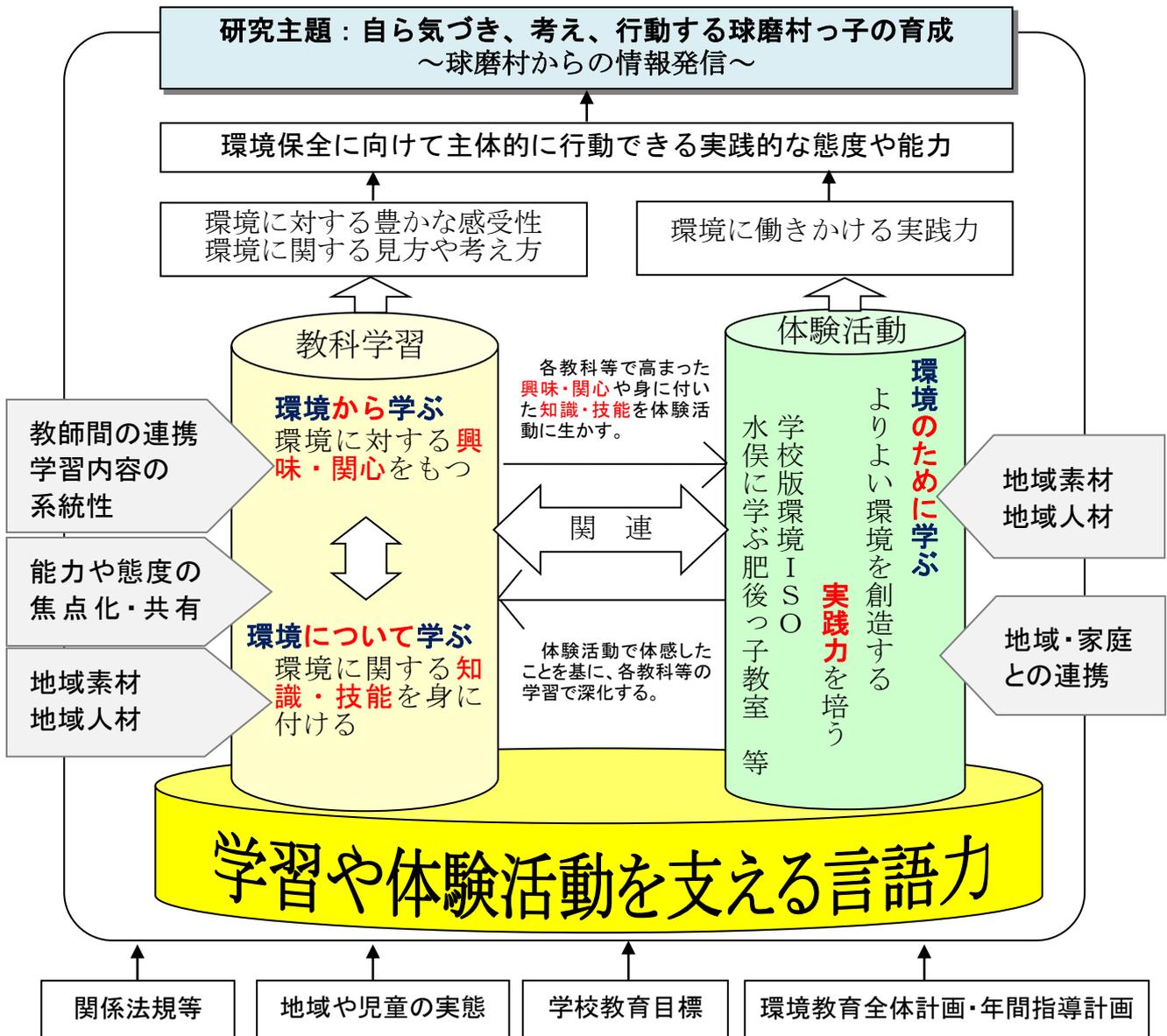
(3) 研究の仮説

環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を基盤として、すべての教育活動において環境教育の視点に立った授業等を展開し、地域や児童の実態に応じた環境に関する体験活動を意図的・計画的に行うならば、児童一人一人に、環境保全に向けて主体的に行動できる実践的な態度や能力が身に付き、自ら気づき、考え、行動する児童の育成につながるであろう。

(4) 研究の視点及び具体的な手立て

- ① 視点1：環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫
 - ア 手立て1：考えをもつための言語活動
 - イ 手立て2：目的に応じて伝え合うための言語活動
- ② 視点2：各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫
 - ア 手立て3：年間指導計画の見直しによる学習内容の焦点化
 - イ 手立て4：身近な環境と関連した学習展開
- ③ 視点3：地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実
 - ア 手立て5：児童が主体的に学び、発信するための「水俣に学ぶ肥後っ子教室」の充実
 - イ 手立て6：「学校版環境ISO」の児童によるPDCAサイクルに基づいた推進
 - ウ 手立て7：郷土理解と地域人材の活用

(5) 研究の全体構想図

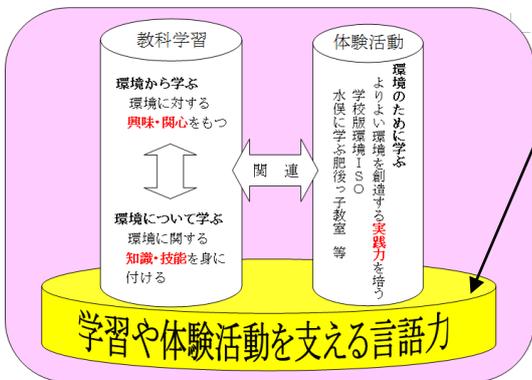


II 研究の実際

1 教科等における取組の概要

本校の研究テーマ「自ら気づき、考え、行動する球磨村っ子の育成」の仮説検証を行うために、昨年度から通算、12回の研究授業を実施した。取組の概要は次のとおりである。

(1) 視点1：環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫について



手立て1：考えをもつための言語活動
手立て2：目的に応じて伝え合うための言語活動

具体的には（平成24年度実施）

第2学年 国語「スーホの白い馬」（物語文）

第4学年 国語「一つの花」（物語文）

第6学年 国語「海の命」（物語文）

第4学年 道徳「布田保之助の心」

を中心に、各教科等で常に意識して基礎づくりをした。また、「伝え合うこと」の基礎・基本の系統は次のとおりである。

学年	ペア	グループ	学級全体
低学年	対話式2人		
中学年		少人数	
高学年			多人数

(2) 視点2：各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫について

第1学年 生活「あきって気持ちがいいね」

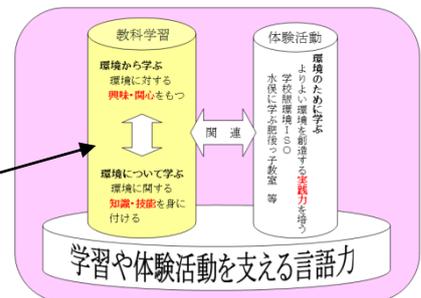
第2学年 生活「レッツゴー！ 村たんけん」

第4学年 理科「秋の自然」

第5学年 社会「森林は、なぜたいせつなの」

手立て3：年間指導計画の見直しによる学習内容の
焦点化

手立て4：身近な環境と関連した学習展開



(3) 視点3：地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実について

① 授業実践

第3学年 社会「物をつくる人は、どんなくふうをしているの」

第3学年 道徳「わたしの村」

第6学年 道徳「ラフティングを体験して」

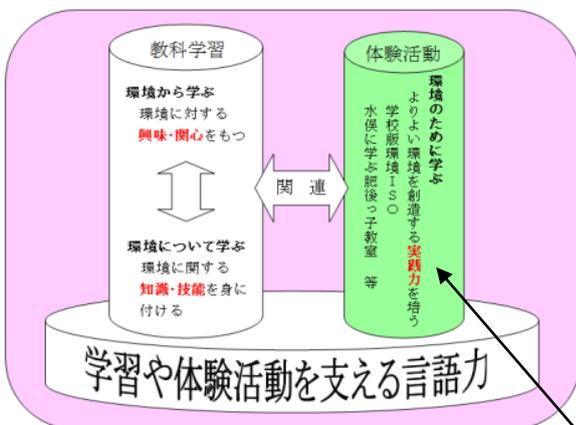
② 具体的な体験活動

「学校版環境ISO」において

- ・クリーン活動
- ・花いっぱい運動
- ・水質調査
- ・学校畑での栽培活動
- ・委員会等での主体的な活動 など

「水俣に学ぶ肥後っ子教室」において

- ・事前学習
- ・現地訪問学習
- ・事後学習
- ・情報発信



手立て5：児童が主体的に学び、発信するための「水俣に学ぶ肥後っ子教室」の充実

手立て6：「学校版環境ISO」の児童によるPDCAサイクルに基づいた推進

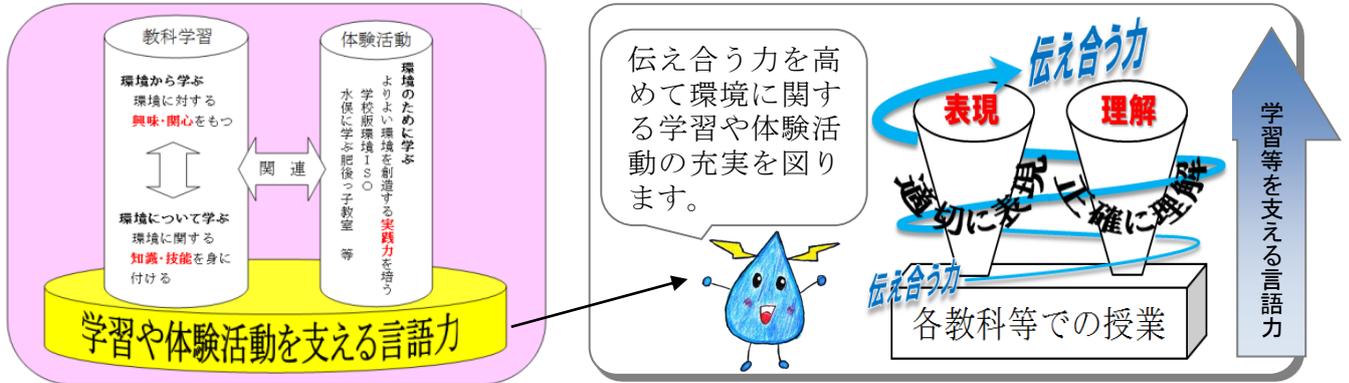
手立て7：郷土理解と地域人材の活用

2 教科等における取組の実際

(1) 視点1：環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫について

ポイント①『各学年の発達段階に応じた伝え合う力の基盤をつくる』

本校では、下の図のように「伝え合うこと」（自分の考えをまとめ交流する言語活動）を手段としながら伝え合う力を伸ばし、児童の思考力・表現力を高めていく授業づくりを展開している。このことは、環境に関する学習や体験活動を支える言語力の育成につながるものである。



伝え合いの形態としては、ペア（2人）、グループ（少人数）、学級全体（多人数）があるが、人数が増えるほど難易度も高くなっていくので、まずは、ペア（2人）による「対話式の伝え合い」を基本とし、各教科等のあらゆる場面において継続して指導していった。

下の図は、児童に配付している「伝え合い名人になろう」（高学年用）である。

色分けは・・・
 黄色＝低学年の基礎
 青色＝中学年の基礎
 緑色＝高学年の基礎
 を表しています。

学級全体
グループ
ペア
基本的な学習訓練・発表ルール

伝え合い名人になろう！（ペア学習の進め方）

A	B	
お願いします（あく手）		
考え	司会	
理由	質問	意見・感想
司会	考え	意見・感想
質問	理由	意見・感想
意見・感想	司会	
司会	意見・感想	

手信号を使って意見の重なりを！

- ・グー（意見）
- ・チョキ（つげくわえ）
- ・パー（質問）

やくそく

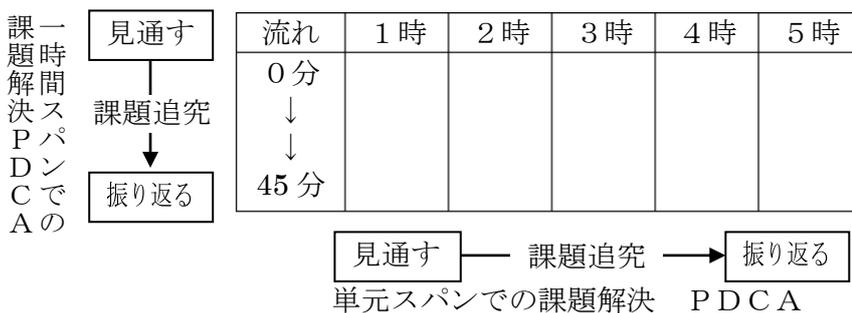
- ・だれとでも進んでペア学習をする。
- ・あく手とあいさつをする。
- ・相手を見て聞く。

司会 あなたの考えを発表してください。
 質問（意見や感想）はありませんか。
 考え 私は…と思います。
 質問 （…さんは、）なぜ…と思ったのですか。
 （…さんの）…という意見に質問です。
 なぜそう思ったのですか。
 理由 それは、…です。
 意見・感想 私は（…さんの…という考えに）…と思いました。

ありがとうございました（あく手）

ポイント②『学び方を身に付ける』

伝え合う力の育成とともに、「学び方を身に付ける（課題解決力）」ことも各教科等において意識しているものである。



左図のように、一単位時間（45分）や単元スパンで見通しをもったり振り返ったりする学習を構築し、課題解決力を高め、環境学習を支える学び方を身に付けるようにした。

○ 第6学年 国語「海の命」(物語文) 8時間扱い

能力や態度	環境教育で重視する能力			環境教育で重視する態度		
	気づく力	考える力	行動する力	認めよう	決めよう	やってみよう
重さ		○		○		

ア 単元の目標(「読むこと」)

登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。

イ 単元計画の概要

次	時	学習内容	備考
一	1	全文を読み、学習の見通しをもつ。	
二	2～6	場面ごとに読み取り、登場人物の考え方や生き方をとらえる。	
三	7～8	登場人物の生き方をまとめ、感想交流する。	単元を貫く言語活動

ウ 授業の展開

見通し
めあて課題把握

自力解決
個人思考

ペア

共同解決
共同思考

グループ

全体

振り返り
感想交流

授業づくりのポイント① 「結論」と「理由」を別を書く

「結論」は、簡潔に自分が言いたいことを書き、「理由」には、その結論の根拠となるものを教科書の文中の叙述から探し、それに対して自分がどう読み取ったのかを書き込むようにした。

授業づくりのポイント② 「結論」だけを先に話す

話し手は書いている情報を読み上げるだけの活動では、思考力は高まらない。「結論」を先に話すことで、話し手は、自分の言いたいことを簡潔に伝えることができる。聞き手は、自分の考えと比べながら聞く余裕が出てくる。そうすることによって、聞き手が質問したり意見を重ねたりする対話式の伝え合いができる。「結論」を先に話し、対話式の学習ができた時に、「読むこと」と「話すこと・聞くこと」が結合し、思考力の高まりが期待できる。このような流れは、ペア学習を基本としながら、グループや全体での伝え合い活動でも継続していった。



理由

なぜなら、教科書190ページ2段落目と3段落目のニメトリ丸もある大物……不漁の日が……というところから父の海に対する気持ちがよくわかりました。そして、5たん目父のもりを体につきさした……ことかいてあり、こんな大きな魚を入で命かけてとろうとする父の次女は、海が父にとっての命だとかいうことが読みとれました。なので父は海のことを思い、海が命じゃないかと思いましたが、

接続語

教科書の文章
結論の根拠となる文章を教科書の中から探し書き抜く。
その際、行動や会話、情景などを通して、想像を豊かにしながら文章を読み取る。

感想や意見、考え
教科書の文章から読み取れることや考えたことを自分の言葉でまとめる。
事実と感想、意見などを区別して書く。



(2) 視点2：各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫について

① 環境教育年間指導計画の見直し

これまで本校で活用していた教科等年間指導計画を「環境教育の方向性」に照らし合わせて見直し、この2年間の研究の中でも試行錯誤しながら、環境教育年間指導計画（一勝地小版）を作成した。（下表は3年生）その際、指導者が授業や活動を実施する上で、特に意識しておきたい環境教育で重視する能力や態度（4つの能力と3つの態度）を単元名や活動名の最後に○等の記号やA等のアルファベットで明記し、各教科等における環境教育で付けたい能力や態度を明確にした。

一勝地小学校環境教育年間指導計画（3年）

月	各教科等	特別活動			総合的な学習の時間	家庭・地域との連携
		学校行事	児童委員会・委員会	学級活動		
4	(理)身近なせんのかんまつ ○▽	見知り遠足○ 交通教室○		3年生になって○ 楽しい雰囲気食べよう ○	特-ふるさとを 知ろう!	学校版環境ISOの取組・水保に学ぶ肥後っ子教室の充実
5	(体)秋の運動会 ○ (国)秋の収穫祭 ○ (道)秋の収穫祭 ○	運動会○ プール掃除○ 避難訓練○			地域のよさについて 気づく ○	
6	(理)自然の恵み ○ (道)秋の収穫祭 ○		エコ集会○	自然災害に 直を 守ろう! ○	気づきを まとめ る ▽	
7	(理)出がけよう自然の中へ ○				気づいた り調べ たりした 内容を まとめ 発信す る □	
8					気づいた ことを 自分 ちで でき るこ とを 考え 行動 （環 境に やさ しく し） する。 ▽	
9	(図)いつもの場所での (理)かけのでき方と太陽の光 ○		エコ集会○			
10	(理)いるいるなごん虫の観察 ○ (理)植物の一生 ○		エコ集会○			
11	(道)秋の収穫祭 ○ (理)光のせいしつ ○ (道)黄色いかさ ○	秋の大作戦 ○ 音楽祭 ○ 避難訓練 ○	エコ集会○			
12	(道)秋の収穫祭 ○	給食週間○				
1	(理)身近なせんのかんまつ ○				1年間の学習を 振り返り、まとめ たものを発信する （新聞等） ○	
2	(国)モチモチの木 ○		エコ集会○	ほろどぼうずとの 交流会 ○		

上の表において、各記号等は次の能力や態度を表すものである。

○：気づく力、▽：考える力①②、□：発信する力

A：認めよう、B：決めよう、C：やってみよう

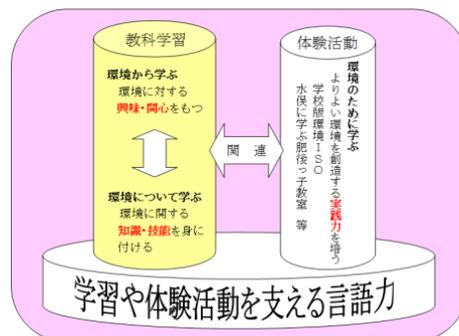


② 身近な環境と関連した学習展開

児童が身近な環境（自然環境だけでなく、地域社会を含めた広いもの）に触れ合い、環境に対する興味・関心を高めることができるように年間指導計画の見直しや学習内容の焦点化を行った。さらに、児童が暮らす地域から、ふるさと球磨村、そして熊本県まで視野に入れて、各学年の発達段階などを考慮しながら環境についての学習素材を洗い出し、学習展開の工夫・改善を行った。

また、環境教育で付けたい能力や態度を単元の指導計画に位置付け、普段の授業の中でも、意識して取り組んだ。環境に関する知識・技能を習得できるような学習展開の工夫については、下記の授業において検証することとした。

- 第1学年 生活「あきって気持ちがいいね」
- 第2学年 生活「レッツゴー！ 村たんけん」
- 第4学年 理科「秋の自然」
- 第5学年 社会「森林は、なぜたいせつなの」



③ 第2学年 生活「レッツゴー！ 村たんけん」20時間扱い

能力や態度	環境教育で重視する能力			環境教育で重視する態度		
	気づく力	考える力	発信する力	認めよう	決めよう	やってみよう
重さ	○	○	○	○		○

ア 単元の目標

自分たちが住む村（地域）を探検し、自然、人々、社会、公共物などに関心をもつとともに、自分たちの生活は、地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所と関わっていることが分かり、それらに愛着をもち、人々と適切に接することや生活することができる。

イ 単元計画の概要

次	時	学習内容	備考
一	1	学校周辺で知っている場所を紹介し合い、学習計画を知り見通しをもつ。	
二	2～6	学校周辺を歩いて探検し、発見したことをカードに書いて情報交換をする。	
三	7～19	さらに詳しく探検し、「よかところ」「よかひと」クイズや紹介文を考える。	本時18時
四	20	「よかひと」さんへお礼の手紙を書いたり、「よかひと登録証」を作る。	

ウ 本時の展開

つかむ・見通す
(5分)

授業づくりのポイント① 「導入での意欲付け」

電子黒板で、探検時の様子や、探検した施設からの励ましのビデオメッセージを見ることで、本時の活動への意欲を高めさせた。



考える
(10分)

授業づくりのポイント② 「多様な言語活動」

考えや知り得た情報を伝え合うために、文章にまとめたり、クイズ形式で紹介したりするなど、いくつかのパターンを準備しておくことで、児童の能動的な活動への手立てとした。

また、よりよいクイズや紹介文になるように、各自の探検での発見をもとに意見の交流をし、アドバイスをを行った。

深める
(28分)

発見カードを、探検場所ごとに貼る

個人でクイズを考える

つくったクイズを探検場所ごとのグループで見直す

クイズを紹介する

意見の交流をする

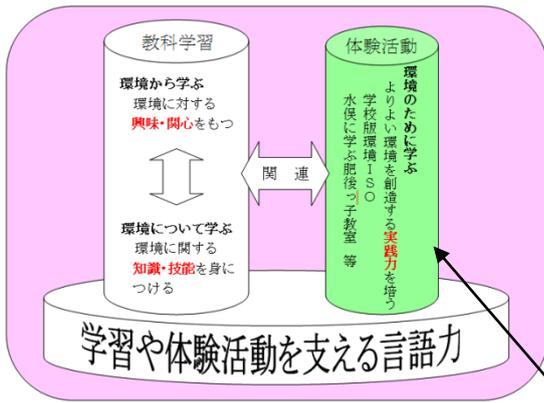
まとめる
(2分)

授業づくりのポイント③ 「目的意識をもたせる」

探検して発見した「よかところ」「よかひと」をクイズやコマーシャル文にし、本校のホームページ上で発信することを、村探検での学習のまとめとした。

しっかりと単元全体の見通しをもつことで意欲的に探検し、村の「よかところ」「よかひと」をたくさん紹介しようと学習に臨むことができた。

(3) 視点3：地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実について



① 授業実践

第3学年 社会「物をつくる人は、どんなくふうをしているの」

第3学年 道徳「わたしの村」

第6学年 道徳「ラフティングを体験して」

② 具体的な体験活動

「学校版環境ISO」において

・クリーン活動 ・花いっぱい運動 ・水質調査・学校畑での栽培活動・委員会等での主体的な活動 など

「水俣に学ぶ肥後っ子教室」において

・事前学習・現地訪問学習・事後学習・情報発信

手立て5：児童が主体的に学び、発信するための「水俣に学ぶ肥後っ子教室」の充実
 手立て6：「学校版環境ISO」の児童によるPDCAサイクルに基づいた推進
 手立て7：郷土理解と地域人材の活用

《環境教育における豊かな体験活動の推進》

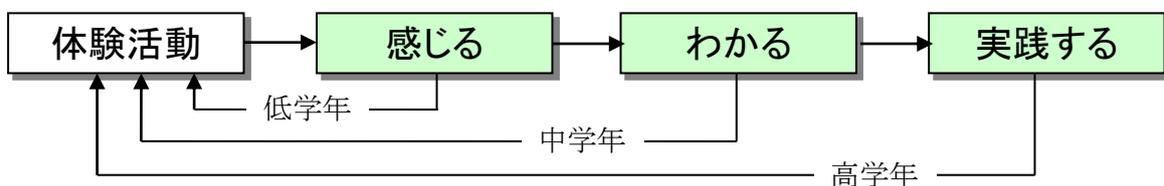
児童の身近な問題から体験を通して学習していくことは、自分と環境問題との関係を考え、自分にできるところから環境保全に取り組んでいこうとする意欲や態度を育てるために有効である。

保護者や地域等の理解と協力の下、**多様な体験活動**をより一層充実させる必要がある。



活動項目	具体的な活動	活動項目	具体的な活動
自然観察	樹木・野草・昆虫・鳥・星座観察	啓発活動	作文・標語・壁新聞・ポスター等
飼育栽培	動物の飼育、花・野菜の栽培等	環境ISO	省エネ、リサイクル、ゴミ分別等
環境調査	生き物調べ、水質調査等	肥後っ子教室	事前・事後学習、施設見学、GT等
施設見学	清掃工場、上下水道施設等	その他	イベント参加、学習発表会等

環境問題の現状やその原因等についての知識の習得だけでなく、実際の行動に結びつけるためには、体験活動により、児童が自ら体験し、「感じる」「わかる」「実践する」というプロセスを繰り返すことが大切である。そこで、本校では、体験活動における学びのサイクルの系統を以下のように設定し取り組んできた。

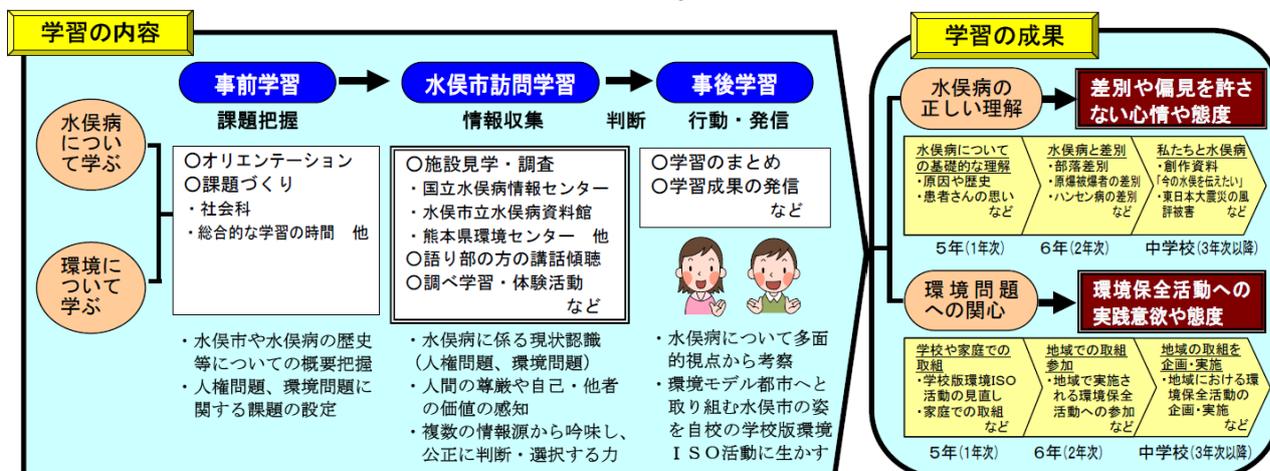


環境にかかわる範囲は次のとおりである。



ア 「水俣に学ぶ肥後っ子教室」の充実

本教室では、下記のように、水俣病について学習することを通して、水俣病を正しく理解し、差別や偏見を許さない心情や態度を育てる。また、環境について学び、環境問題への関心を高め、環境保全活動への実践意欲や態度を身に付けることをねらいとして行ってきた。



本校では、事前学習・事後学習を特に意識し、充実した「水俣に学ぶ肥後っ子教室」になるように、以下のような取組を行った。

(ア) 事前学習

a 児童の実態把握

学習前の水俣病に対する知識と、身の回りの環境に対する知識を把握するため、アンケートを取った。アンケートの結果から、水俣病に対する正しい知識（水俣病の原因や症状など）を把握している児童は少なく、事前に水俣病や水俣に関する学習を行う必要性を感じた。

b 講師の先生を招いての合同学習会

一緒に学習をする渡小学校5年生の児童と合同学習会を開いた。合同学習会では、講師を招き、「水俣病の歴史」「水俣病の原因」「環境モデル都市としての今の水俣」についての話をいただいた。講話を聞いた後の児童からは、「水俣病はうつる病気ではないということが分かった」「水俣病の原因が分かった」「もっと水俣病について調べてみたい」「今の水俣の取組について学びたい」「球磨村の自然は自分たちが守らなくてはいけないと思った」という感想が出された。



c 現地訪問学習に向けての課題設定・学習計画作成

合同学習会で学んだことをもとにして、現地訪問学習では何を学んでいくかを、児童一人一人に考えさせた。児童から学習課題として、環境面では「環境モデル都市に生まれ変わった水俣市の取組」「どのようにして海を再生させたのか」等が出された。

また、水俣病については、「水俣病の原因」「患者さんの思い」「水俣病の症状」等が出された。

(イ) 現地訪問学習

a 水俣病資料館

水俣病資料館では、まず一人一人が展示品や当時の写真、年表等から自分の学習するめあてに沿って調べ学習を行った。その後、水俣病語り部の方から話を聞いた。話を聞いた児童からは、「『人間の欲が、こういうことを起こした』と言われ、欲について考えた」「水俣病のような公害が二度と起きないように、自然を大切にしていかなければいけないと思った」などの感想が出された。



b 熊本県環境センター

環境センターでは、「水の学習」を行った。川や海を汚染している原因が家庭排水であるということを学んだ。実験では、家庭排水の中でも何が一番水を汚しているかを確かめた。



実験後は、環境センター内に展示してある「水俣の環境への取組」を見学した。環境モデル都市としてたくさんの取組があり、熱心にメモをしている様子が見られた。

児童はゴミの分別の種類が多さやリサイクルされたゴミから様々なものができると学んでいた。実際に自分たちでも実践するため、昼食の弁当のゴミを分別する取組を行った。

(ウ) 事後学習

a 学習したことをまとめる

現地訪問学習後、国語の学習単元「次への一歩」（活動報告書）の取組として、5月から7月までの取組を活動報告書としてまとめた。

9月に入りそれぞれのめあてについて、もっと詳しく調べたいことや補足したいことなどを調べ、壁新聞にまとめた。まとめていく中で、「自分たちが学習したことを学校みんなに伝えたい」「球磨村のみんなに伝えたい」という声が児童から上がるようになった。そこで、今回学んだことを校内で開かれる環境学習研究発表会で発表することにし、計画を立てた。

b 発表会で啓発を予定（環境教育研究発表・球磨村生涯学習フェスティバル）

環境教育研究発表会で発表するにあたり、児童を3つのグループ（構成詩係・新聞係・資料係）に分け、発表内容を考えていった。

イ 「学校版環境ISO」の推進

環境ISO宣言

- 節電・節水をします
- 残菜Oをめざします
- ものを大切にしゴミを減らします
- 花いっぱいの学校にします

本校の「学校版環境ISO」の宣言文は左記のとおりである。これらの目標が達成できるように、学校総体として取り組むことにした。

特に、児童の主体的な活動になるように心がけ児童の気づきや意欲を大切にしていた。

本校の「学校版環境ISO」の具体的な取組について、以下に述べる。

(ア) クリーン活動

地域の環境保全活動として、11月に「クリーン作戦」という児童による地域のゴミ拾い活動を実施した。学年ごとに各地区に分かれてゴミ拾いをし、最後に分別作業をした。この活動は、地域の環境美化のためだけでなく、地域の方々に見ていただくことにより、環境保全の啓発にも繋がっている。



(イ) 花いっぱい運動

全校児童で、花いっぱい運動に取り組んでいる。6～7月に花の苗を植えつけ、学校に飾って育てた。花はマリーゴールドとサルビアから好きな物を選べるようにした。昨年度からの取組で、水やりや草取り、花詰み等の世話を続け、自分の花が元気に成長する様子に喜んでいる姿もしばしば見られた。冬からは、パンジーやノースポールを育てる。



(ウ) 水質調査

6年生では理科の自由研究の一環として、校区を流れる4つの川（球磨川、芋川、庄本川、中園川）の水質調査を行った。熊本県の調査項目に準じて、水温、透視度、pH値・COD値、底生動物等を調べた。

みんなで川底の生き物を網で捕り、種類ごとに分類して、指標生物資料を見ながら特定していく作業をした。小学生には少し難しいが、児童はとても意欲的だった。2～3mm程の小さな生物でもよく見て調べていた。

調査の結果、どの川も快適または親しめる水環境だった。児童は、自分たちの村にある川がきれいな水環境であることが分かり、嬉しそうだった。なお、水質調査は、クラブ活動（4～6年）でも行った。





(エ) グリーンカーテンの設置

4年生では、減温効果を兼ねたグリーンカーテン作りに取り組んだ。児童の環境に関する意識付けをするために、ヒョウタン等を育て、それぞれの成長の様子を毎日観察した。植物によって種の様子や数が違うこと、植物の命が種によってつながっていることにも気づくことができた。

(オ) 省エネ出前授業

4・5・6年生を対象に「一般社団法人省エネルギーセンター」より講師を招いて、「省エネ」についての学習会を実施した。地球温暖化の現状や「省エネ」することの大切さなどを2時間かけて学習した。児童自身が省エネ大使として各家庭で実践することを具体的に考え、日常化ができるように意識付けを行った。



(カ) 地域人材の活用について

a 栽培活動における学校応援団の活用

本校では、野菜の世話を通して植物を育てる大変さや植物の成長や収穫の喜びを感じることができることをねらって、学校の畑で野菜の栽培活動を行っている。その際、地域の野菜作りに詳しい方を学校応援団として学校に招き、環境整備を積極的にしていただき、野菜作りの基礎を学ぶことができた。定期的・継続的に来校して指導いただいたことによって、子どもたちは収穫までの手間を目の当たりにし、大変さを実感することができた。



b 人吉球磨環境協議会の授業

人吉球磨環境協議会の方に来ていただき、5・6年児童を対象に環境に優しい身近な生活の仕方について教えていただいた。子どもたちもより身近なこととしてとらえ、日々の暮らしの中でいろいろ工夫できるということを学んだ。



c G T の活用

5年生社会科では、授業に球磨村の森林組合にお勤めで、学級の保護者でもある方をG Tとして招いた。学習のまとめの段階で、授業で使用した資料の解説や球磨村の森林についての現状や思いをお話いただいたことによって、球磨村の森林をより身近な問題としてとらえることができ、授業がより深まった。

(キ) 児童の主体的な活動

平成 24 年度には主に 2 つの委員会が中心となって節電・節水・給食の残菜ゼロなどの目標を設定し、環境にやさしい暮らしに取り組んだ。

平成 25 年度では、昨年度の反省から児童の活動を充実させるために、今まで 2 つの委員会で行っていた活動を他の委員会にも広げることにした。



a 環境委員会の活動

環境委員会では、平成 24 年度は主に 3 つの活動を行った。

- ①水と電気の使用量調査
- ②節電コンテスト
- ③リサイクルコンテスト

①では、学校における水道水と電気の使用量を月ごとにグラフ化し、節水・節電への啓発を行った。

②では、昼休みに無駄な電気を使っていないか委員会の児童が調べ、よくできていた学年を紹介した。③では、リサイクル回収ボックスを用意し、その箱にリサイクルできる紙を入れるようにした。ゴミを回収する際に、できていたかどうかチェックを児童が行い、よくできていた学年を節電コンテスト同様に紹介した。

平成 25 年度は、活動をより充実させるために新たに 2 つの活動を行った。

- ④牛乳パックの回収
- ⑤ペットボトルキャップの回収

球磨村では、牛乳パックやペットボトルキャップがゴミとして捨てられることが多いことから、省資源の目的で取り組むことにした。学校の昇降口にコンテナを用意し、その中に家庭から持ってきた牛乳パックやペットボトルキャップを入れるようにした。



b 給食委員会の活動

給食委員会では、平成 24 年度は主に節水を呼びかけた。球磨村では給食後に牛乳瓶を洗うように決まっている。そこで給食後に牛乳ビンを洗う際にできるだけ少ない水で洗おうと、使った水の量をグラフ化し、ランチルームに掲示した。全校児童で 7 リットルの水を使っていたが、呼びかけ後は 2. 2 リットルの水でできるようになった。

平成 25 年度は、学校版環境 ISO の関連から残菜ゼロの活動を充実させた。これは、給食後に残菜があったかどうかを給食委員が調べ、その結果を梨の実（残菜なし）で表現した。なぜ梨を活用したかという、一勝地は一勝地梨で有名であり、児童にとっても身近な食材だからである。



c その他の委員会の活動

運営委員会が中心となって代表委員会を行った。ここでは、児童から「環境のために各委員会でできることはないだろうか」という提案があり、それぞれの委員会で取り組む内容を話し合い、下記の活動に取り組んだ。



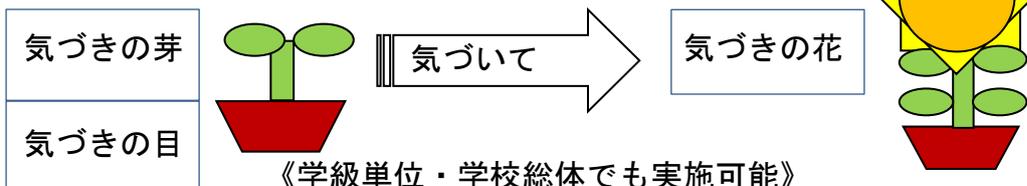
各委員会名	活動内容
運営委員会	リサイクル用紙の回収および呼びかけ
図書委員会	環境に関する本の紹介 図書の整理整頓の呼びかけ
保健委員会	歯磨き・手洗い等の節水の呼びかけ
放送委員会	季節の音楽を給食・掃除の時に流す
体育委員会	体育倉庫等の整理整頓、運動場の整備



(ク)「気づきの花」の取組

この取組では、各学級・各委員会で、気づいたことを「芽」に設定し、目標を幹に書いて、葉に月ごとの結果を書き込み、目標が達成されたときには、花を咲かせるようにした。

「気づきの花」の取組のイメージ



《学級単位・学校総体でも実施可能》

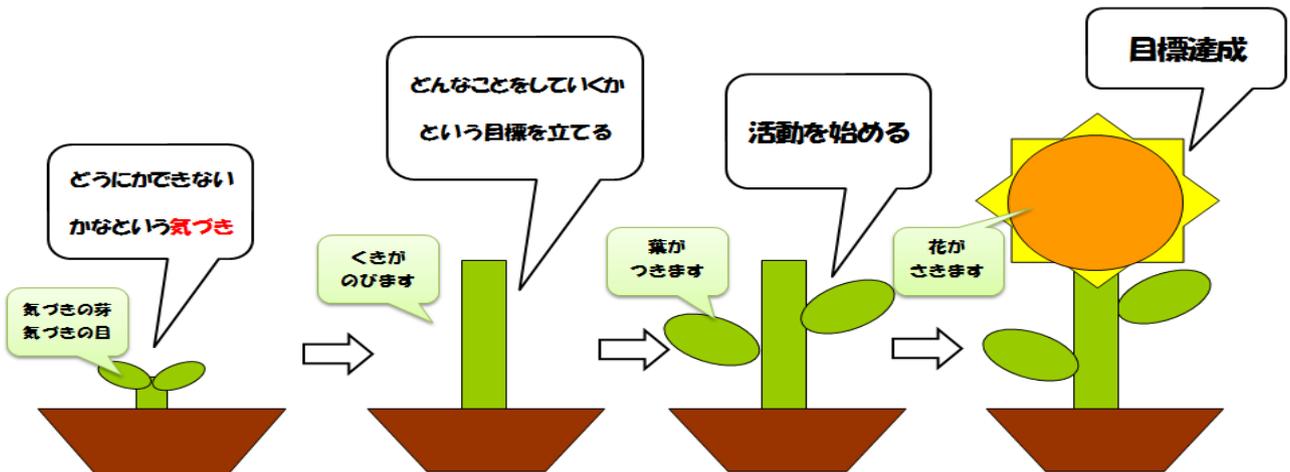
- ① 子どもが気づきの芽をたくさん見つける
- ② 芽から茎が伸びる（計画）
- ③ 具体的（継続的）に取り組む（枝や葉を付けていく）
- ④ 花が咲く（結果として表れる）

各学級・各委員会ごとに一つの芽を決めて取り組んだことをエコ集会で発表し、気づきの芽を全校児童で育てる。



【平成24年度、運営委員会から出された気づきの芽】

- エコの日の設定
- エコキャラクター募集
- ペットボトルキャップ回収
- プルトップ回収
- 牛乳パック回収
- ベルマーク回収
- 家庭へのアンケート



Ⅲ 研究のまとめ

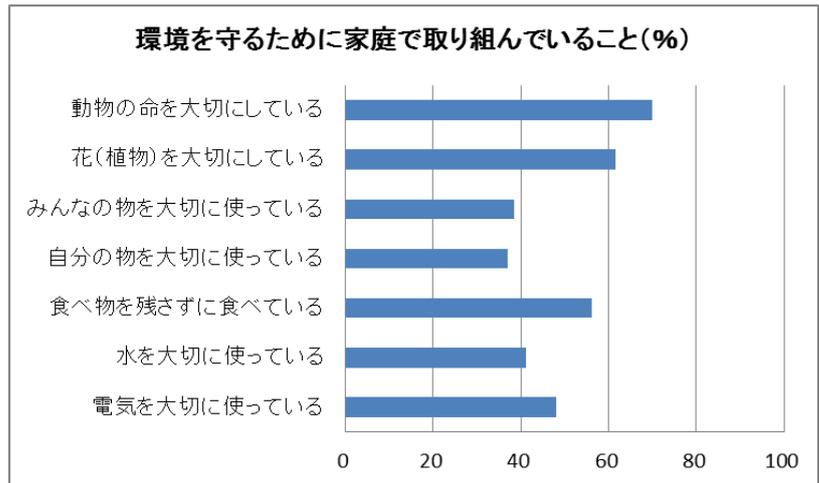
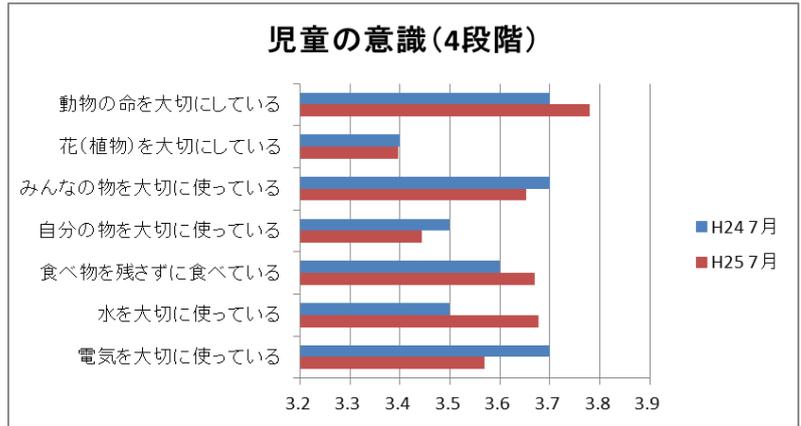
1 環境に関する意識調査（児童、保護者アンケート）から

平成24年と平成25年の7月に児童と保護者を対象に環境に関する意識調査を行った。

児童は、「動物の命を大切にしている」「食べ物を残さずに食べている」「水を大切に使っている」の意識が上がっている。しかし、その他の項目については、下がっている。花を育てる活動は6月に始めたが、始めたときよりも意識が下がっている。物を大切にすることと節電については、環境学習を進めていくうちに児童の自己評価が厳しくなってきたのではないかと考えられる。

「球磨村の自然で好きなところ」については、山や森林、川、空気、田、水、昆虫、植物、落ち葉などの記述があり、学習したことが反映されている。「環境を守るためにしていることやしたいこと」については、節電・節水やゴミを捨てない・分別する等、学校全体で取り組んでいる項目が多く出ていた。

保護者に、平成25年7月にアンケートをとったところ、環境を守るために家庭で取り組んでいることについては、「動植物の命を大切にしている」が多かった。また、「物を大切にしている」「節水」「節電」について取り組んでいる家庭は50%に満たなかった。そこで、PTAと連携して家庭版環境ISOの取組を始めた。



2 学校版環境ISO意識調査（平成25年9月集計分）から

児童の意識調査では、「節電」や「節水」の意識がとても高いことが分かる。給食の残菜も出ない日がほとんどである。しかし、「ものを大切に使ったり分別したりすること」や「花の世話を忘れずにする」ことにおいては、学年によって意識を高める必要がある。月ごとに、児童の意識調査を分析し、日ごろの児童の実践の様子を的確に把握しながら、児童に体験活動の意義をしっかりと理解させ、学校版環境ISOを意識した学校生活を送れるよう指導していきたい。

%	学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	なごみ	計
①	必要のないときに電気を消すことができたか。	100.0	53.3	100.0	100.0	95.5	100.0	100.0	91.0
②	バケツでぞうきんを洗うことができたか。	88.9	100.0	100.0	100.0	100.0	89.5	50.0	95.5
③	歯磨きの時にコップを使うことができたか。	100.0	100.0	92.3	100.0	90.9	68.4	100.0	89.9
④	給食を残さずに食べることができたか。	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	89.5	100.0	97.8
⑤	ものを大切に使ったり分別したりできたか。	100.0	66.7	61.5	100.0	86.4	84.2	100.0	82.0
⑥	花の世話を忘れずにしたか。	100.0	73.3	61.5	100.0	100.0	94.7	50.0	87.6

3 研究の成果（○）と課題（▲）

（1）視点1「環境に関わる学習や体験活動を支える言語力を高める工夫」

- 「伝え合い名人になろう！」シートによる伝え合い学習のパターンを児童に定着させ、PDCAサイクルを重視した授業づくりを推進したことで、学年の発達段階に応じた表現力や、環境問題に対する主体的な気づきにつながる思考力も向上してきた。
- ▲伝え合いの場において、どの学年の児童も根拠を明らかにした発表はできるようになってきた。今後は、児童から出された様々な考えをさらに深めることができるような場の設定や発問の工夫を行っていきたい。

（2）視点2「各教科等における環境と関連付けた学習展開の工夫」

- 梨作りや地域の水道施設の教材化など、身近な環境と関連付けた学習展開の工夫を行ったことで、ふるさとの自然環境だけでなく、そこで生活する人々の工夫や文化の素晴らしさに気づくことができた。同時に自然愛護や郷土愛の心情もさらに高まった。
- 各教科等の学習で習得した知識や技能を環境に関わる体験活動に活用し、体験活動を通しての気づきを教科学習において深化させるという関連性は、教職員に浸透してきた。また、各教科等や各単元のねらいを十分に把握して、環境教育で重視する能力や態度を再検討していったことで、環境教育の視点に立った授業づくりの工夫と改善も教職員の間で定着してきた。
- ▲「環境をとらえる視点」や「環境教育で重視する能力や態度」を本校なりに分類したり修正したりしたことで、ねらいを明確にした授業実践を行うことができた。しかし、環境教育での評価の在り方やその活用については、まだまだ研究半ばである。

（3）視点3「地域や児童の実態に応じた環境に関する授業や体験活動の充実」

- 人吉球磨環境協議会の方による地球温暖化防止の出前授業や胎児性水俣病患者の方々との交流会など、関係機関との連携やGT等の効果的な活用に取り組んだことで児童の環境問題への関心がより一層高まった。
- 各教科等での学びや学校版環境ISOへの取組により、教室やトイレの電灯をこまめに消したり、ゴミを分別したり、牛乳パックやペットボトルキャップを回収したりする行動様式が定着してきた。さらに、朝のボランティア活動や登下校時のゴミ拾いなど、自主的に環境保全活動へ取り組む児童が増えた。
- 学習発表会や地域の催し物への参加、学級通信・学校便り等の啓発活動を通して、節電・節水・リサイクル等への関心が保護者にも広まった。研究2年目には、PTAによる家庭版環境ISOの取組もスタートし、家庭や地域での取組も行われるようになってきた。
- ▲「水俣に学ぶ肥後っ子教室」の学習主体である第5学年からの啓発や、関係機関との連携等により水俣病問題や環境都市水俣の取組への関心が児童の中に根付いてきた。今後は、前後の学年との系統性を考慮した指導計画を見直すことで、さらなる充実を図っていきたい
- ▲「自ら気づき、考え、行動する」というサイクルは、全職員で共通理解をすることができ、環境保全活動に自主的に取り組む児童や保護者も増えてきた。しかし、全家庭や地域に浸透したわけではない。さらなる意識化・行動化を進めるために、連携の在り方を工夫するとともに、啓発活動や授業実践の工夫と改善を図っていきたい。

お わ り に

「学校での環境教育は、どう進めたらいいんですか？」これが、職員から出た最初の言葉であった。

一般的に行われる「リサイクル」や「ゴミ拾い」等ではないことは分かっているが、学習指導要領や環境教育指導資料に書かれている環境に対する豊かな感受性や環境に関する見方や考え方、環境に働きかける実践力の育成をどのように学校教育の中で進めていけばいいのか。不安の中からの出発であった。

しかし、発表会も近まったある日の昼休みの職員室での光景である。何人かの先生方が集まり、研究授業の検討会をしている中で、それぞれの先生が、「本時における環境教育で身に付けさせたい能力や態度は・・・だから、その目標やめあてでは・・・。」と自分の環境教育に関する思いを熱く語られているのである。

環境教育の研究推進校の指定を受け、不安いっぱいあの時の先生方とは全く違った姿に、頼もしさを覚えた。そんな先生方に育てられた子どもたちは、みんな球磨村の自然・文化・人々が大好きである。本日の研究発表会で、そのような子どもたちの姿をお見せできれば幸いです。

私たちのこの取組によって、本校の子どもたちが、ますますふるさと球磨村を好きになり、球磨村を愛し、誇りに思うとともに、環境保全活動に主体的に取り組む大人に育ってくれることを信じて、これからもこの取組を続けていきたいと思えます。

最後になりましたが、本校の研究推進にあたり、温かく適切なお指導、ご助言をいただきました関係諸先生方や各団体等の皆様にご心から感謝申し上げます、今後とも尚一層のご指導・ご助言をお願いし、お礼といたします。

平成25年11月15日

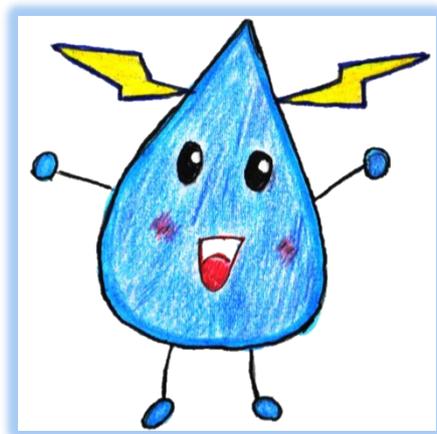
球磨村立一勝地小学校 教頭 鬼塚 俊夫

【参考文献等】

文部科学省 『小学校学習指導要領』
文部科学省 『小学校学習指導要領 解説－総則－』
環境省 「授業に活かす環境教育－ひとめでわかる学年別・教科別ガイド－」
熊本県 「熊本環境基本方針」「熊本県環境基本計画」
熊本県教育委員会 環境教育指導資料「学校における環境教育の一層の充実」
国立教育政策研究所 教育課程研究センター「環境教育指導資料」
山都町立清和小学校 「研究紀要」
荒尾市立荒尾第三中学校 「研究紀要」
東京都新宿区立東戸山小学校 「研究紀要」
文溪堂 「環境教育指導プラン」低学年・中学年・高学年

【 研 究 同 人 】

(平成24年度球磨村立一勝地小学校職員)				(平成25年度球磨村立一勝地小学校職員)			
中村 和弘	鬼塚 俊夫	井口 秀明	国武 靖士	鬼塚 俊夫	尾方 久生		
橋本 真巨	西 聖二	黒木 文敏	橋本 真巨	西 聖二	黒木 文敏		
中島 和美	東 栄三	岩崎祐美子	中島 和美	東 栄三	岩崎祐美子		
内村 那奈	薮 寿美	中村恵里佳	内村 那奈	那須司保美	薮 寿美		
重松加代子	薮 明美	尾崎 聖	重松加代子	薮 明美	尾崎 聖		
今村 晴香	槻木 睦子	原 ひとみ	槻木 睦子	原 ひとみ			



環境ゆるキャラ「きずくちゃん」について

平成 24 年度、一勝地小学校環境委員会が環境ゆるキャラを全校児童に募集しました。

そして、当時本校 4 年生の浦野青空さんが考えたゆるキャラに、職員と児童が考えた名前をミックスして「きずくちゃん」と命名しました。

絵からも分かるように、「き」は電気の「き」、「ず」は一滴のしずくの「ず」、「く」は、球磨村の「く」を表しています。ちなみに「きずく」は、テーマに掲げる「気づき、考え、行動する球磨村っ子」も表しています。